

き事ならずや、略○中 總て脈と稱するものは、血の通ふ管なり、其始を爲すは、心の臟にて、其心に連なる大管より、血を注ぎ出して、諸部へ周流すること、間斷なし、特り血の和不和を察するは、脈を切にして、其運動を候ふより、著實なるはなし、東洞翁、診脈をなすは、用なきものと教られしは、恐は疎漏の至りといふべき歟、○下

〔和氣氏系圖〕瑞策（中略）平信長公、豐臣秀吉公、寵遇異他、又或時、有人診脈、雖無常病、有必死之脈、云、人皆怪之、明日果死、弓筒時人其妙、工之妙矣、

〔薩戒記〕應永三十二年七月廿七日甲子、入道内相府三箇度令參内給、御惱之間、可座相國寺、略○中 或人云、吐氣令出來御、又御咳氣御座各御惡相之由、醫師申云々、今日御脈六動云々、當時參入之醫師非本道輩、號壽阿彌、自入道内相府被召進也、自去々々年御惱之時、奉療治之者也、

〔滿濟准后日記〕永享二年四月八日、將軍○足利御虛氣御脈在之歟、由醫師三位申入也、仍虛氣符事、花頂僧正相傳之由、被聞食及也、可書進由、以三位被仰問、即申遣了、彼僧正申様、此符事、聊傍傳子細在之、雖然未書此符也、初可書進上條、尤其憚多端之由、再三辭申入也、不及披露、只可書進由、加問答了、

〔碧山日錄〕長祿三年六月二十七日戊寅、使龍子詣號醫師板坂者、求其救、又問松井大進子、診脈曰、病候輕於疇日、莫爲意云、乃領前胡湯十五服、

〔蓮如上人御一生記〕六同○明應八年三月七日ノ曉キ、御自脈ヲウカハヒ玉ヒテノ玉ヒケルハ、アラ嬉シヤ違フ所アリ、往生ハチカヅキヌ、略○中 醫師藤左衛門御脈ヲ伺ヒ奉ルニ、誠ニ胃ノ氣ノ御脈違フ所アリト申上シカバ、上人サゾト覺ヘタリト仰ラレキ、略○下

〔槐記續編〕享保十六年五月十日參候、滋井入道殿參ラレ、御前ニテ、拙エ仰ラレケルハ、醫書ニ、鉤脈ト云事アル由、脈狀病形イカヤウナルモノニヤト、拙答テ申シ上グ、弦鉤毛石ハ、四時ノ定脈ニシテ病脈ニ非ズ、鉤ハ夏ノ平脈ニシテ前曲リ、後直ク、帶鉤ヲトル如クトコソ申セト申シ上シニ、ソ